

海外から——新年のメッセージ



イギリス 柳 沢 敏 勝

明けましておめでとうございます。

イギリス、シェフィールドから新年のご挨拶を申し上げます。

第二次大戦の戦勝50周年を祝う式典が昨年5月と8月にイギリス各地で開催されましたが、冷戦終了後の新たなヨーロッパ形成への一里塚として一区切りつける意味があったようです。もっとも、イギリスにはいまだに根強いEU統合反対論があり、保守党分裂か、などというような国内での副産物も生み出しながら、EU統合をめぐるイギリスと独仏との主導権争いも絡み、複雑な形相を示してはおりますが。

外から眺めていて、戦後50年にあたる1995年は日本にとっても転換の年であったように思われます。経済的価値基準をのみ錦の御旗とした経済成長一辺倒のあり方の転換を不況下での円高や銀行騒動に、また心の拠りどころともなる価値規範を喪失した日本社会の無機質で寒々とした情景をオウム騒動などにみることができると思われるからです。

しかし、少々不安に思うことは、私たちが国際社会のなかに自らを位置づけ相対化してみる努力を怠りすぎてはいまいか、という点です。日本は国際社会のなかで起こるさまざまな問題に我関せずとの態度を貫き通しているかのように見えてくるからです。政治家や官僚の資質、度量が問われているようです。国際社会のなかでの相対化の作

業を抜きに転換を論じてみてもむなし議論に終わってしまうかもしれません。

イギリスにきて早9カ月が過ぎましたが、英語社会のなかで「生活する」ことに追いまくられ、研究成果があがっているという実感がまだ十分にはありません。しかしそうしたなかにあってもすこしよく観察してみると、資本主義経済の歴史の長いイギリスでは、この経済的な仕組みが生み出すきしみを緩和するためのさまざまな知恵が人々のなかに自然発生的に芽生え、生かされ、長い時を刻んできているように思われます。社会のなかにたいへん多くのヴォランタリーな助け合いの組織や知恵をごく運動にみることができるところです。

長い間、発展途上国に対する草の根援助組織として活動し、国内ではリサイクル・ショップを全国展開しているOXFAMなどがその代表的な例だと思います。もちろん協同組合についてはいうまでもないことです。大手スーパーの価格競争に押しまわれ、消費協同組合の地盤沈下が著しいようですが、それでもいまなお町の中心街に堂々と店舗を構えていることが多いようです。

ヨーロッパ大陸、とくにフランス、イタリアなど南欧諸国で議論されている「社会的経済」組織が、イギリスでも多様なヴォランタリー組織として広範に存在し、日常的に募金集めなどの自発的な活動を繰り返し続けています。こうした姿をみえますと、高水準の失業率に悩まされている国だと

は思えないほど、ある種のゆとりをこの国の人々は感じさせてくれます。

このような視点からみてみると、公と私との二分法的方法でしか社会経済の仕組みを把握できなかったあり方が大きく変容を迫られている時代が今であり、そこに「協」という第三の枠組みを用意し、公・協・私の組み合わせによって社会を構成しなければ、さまざまな問題の解決がつかなくなってきていることに多くの人々が気付きはじめていると思われる。

イギリスでも80年代のサッチャー政権から今日まで一貫して規制緩和が進められ、国有企業の民営化が推し進められてきましたが、それは公に代わって民（私）が経済活動を担うというあり方、つまり経済効率の追求であったことはいうまでもないことです。しかしながら、公に代わる私だけでは働く人々やサービスを受ける人々のニーズを満たすことが必ずしも容易でない、ということもまた長い歴史が教える教訓だといえます。

今春に予定されている国鉄民営化（一部はすでに私企業になっている）についていまだ熱い議論が交わされており、またすでに民営化された電気や水道についても、その公共的性格についての議論が折に触れ執拗に繰り返されています。大事にされなければならない社会的価値に関してある種の国民的合意が長い時を経て形成され、それが議論の底流に潜んでいるように思われます。

イギリスの人々の多くはカントリーライフなる田舎での暮らしやカントリーサイドの散策などに生活上のおおきな価値をおいており、そうした生活の背景をなす重要な要素として自然の景観や歴史的遺産を大事にしているようです。しかし驚くことは、そのための組織としてナショナル・トラスト（イギリス最大の土地所有者のようです）やイングリッシュ・ヘリテジなどの大規模なボランティア組織を個人が自発的に協同で作っている姿です。こうした姿に社会的価値に関わるある種の国民的合意の一端を見ることができま

もちろん、まだ階級間格差も大きく、所得水準

にせよ行動様式や意識にせよ大きく異なる部分を抱え込んだ社会ではありますが、私たち日本人のように価値基準をお金や偏差値にのみ求めるようなある種の画一性・均質さは少なく、その分だけ社会的摩擦が大きいとはいえ、社会としては異質さを容認する健全さをもっているように思われます。私どものような異国人にとっては、この寛容さが暮らし易さを感じさせる重要なポイントのようです。

さらに日本と大きく異なると思われる点は、お年寄りが一般に大事にされていることです。社会生活のなかでお年寄りの発言が大事にされ、「パンクな格好のお兄さん・お姉さん」でも素直にお年寄りのいうことに従っている姿を散見することができます。けっしてお年寄りには遠慮していません。堂々と高速道路を100kmで快走しております。すでに日本で失われて久しい姿、価値意識だと思います。その意味では日本よりもある種の健全さ、ゆとりを保持しており、経済力の衰退が一般常識となっているとはいえ、日本よりも長生きする国なのではないかと思っております。

話が少々横にそれたようです。「協」の話に戻りたいと思います。この15年間、保守党政権の下で進められてきた規制緩和はたしかにイギリス経済の復活に多少寄与したようではあります。しかし賃金水準はヨーロッパのなかでも決して高くはなく、働く人々の満足度も最下位グループに属していることが最近の調査で明らかにされました。高水準の失業率などと引換えの規制緩和、経済再建であったわけですから、当然といえば当然の結果でした。

こうした規制緩和によって失業の危機にさらされた人々のなかに、共同出資によって自らの雇用を守ろうとした数多くの取り組みをみるすることができます。代表的な例はバス労働者たちです。形態や内容は多様ですが、彼らは従業員持株制度（ESOP）を積極的に活用し、それを通じて共同出資し、自らの職場を買い取ることによって雇用を守ろうとしたのです。現在バス産業で働く人々の20%が、ESOPを通じて企業所有者になって

いるといわれています(LSEの報告書、1995年)。

また、協同による仕事おこしを通じて働く場を確保しようとする動きも数多くあります。シェフィールド市役所に勤める隣人の話のなかにもいくつかの例ができてきます。娘の友達の父兄との話のなかにもいくつかこうした例が出てきます。街を歩いていても、労働者協同組合のマークをつけた車と出会うことすらあります。つまり、これら

の経験は協同による仕事おこしがけっして稀な例ではないということを教えてくれています。

こうした事例を発見し調査研究するのが今回の在外研究の主な目的です。これまでの経験でも、実に多様な「協」の世界がイギリス社会の奥底に根付いていることが分かります。こうした世界についての「イギリス通信」を送れるようになりたい、それがひとつの抱負です。

海外から——新年のメッセージ



アメリカ R.Mashall

新年あけましておめでとうございます

ワトコム郡ベリンガム市における協同

ワトコム郡は、小さな地域にしては、あらゆる種類の協同組合に対して、きわめて強く大きな関心が寄せられている地域です。郡の最大の都市であるベリンガムには、郡の人口12,000人の半数が住んでいます。郡内の多数の人々は、いまだに農業や漁業、林業を営んでいます。ベリンガムは、シアトルの北、約90マイルのところにあります。労働者協同組合の研究者ならベリンガムを知っていることでしょう。そこには、1930年代に始まった北西部合板協同組合の一つである、ベリンガム合板があるからです。ここにはさらに、巨大な農民協同組合や、医療協同組合、二つの協同組合学校、地域食料協同組合、協同組合製粉所、住宅協同組合、いくつかの信用組合、および労働者所有

の食料品店があります。会計協同組合は最近閉鎖しました。そして今、この文章の主題となる、新しい種類の協同組合がスタートしつつあります。

一般(あるいは統括)協同組合が、協同組合、とりわけ労働者協同組合の発足を援助する協同組合として、計画されているのです。こうした協同組合についてのアイデアを思い付いたのは、家のないティーンエイジャーのために活動してきた人でした。彼は、子供たちに仕事と住む場所を見つけ出し、麻薬やアルコールの問題から彼らを助けようとしてきました。彼はこれらの子供たちのために、また彼らとともに、劇を書きました。劇の中に子供たちの人生経験が用いられていて、観客は子供たちのそれまでの人生を知ることができるような劇でした。子供たちも役者にして、彼はこれらの劇を上演し、子供たちのためにお金を集め、また彼らの治療の場にもしました。彼はまた、リサイクルされたポリボトルでおもちゃや枕を作